



日本記者クラブ

研究会「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」③
「ヒスパニック＝ラティーノとアメリカ政治」

上 英明

神奈川大学 助教 (2016年4月着任)

2016年3月18日

2016年米大統領選の分析を通して、米国がどこへ向かうのか、政治、経済、社会の地殻変動を読むシリーズ企画「変わるアメリカ・変わらないアメリカ 米大統領選」。米国で博士号を取得し帰国したばかりの上英明（かみ・ひであき）さんがヒスパニック＝ラティーノをテーマに語った。

移民国家アメリカでなぜか広がるネイティヴィズム（排外主義）をキーワードにトランプ現象を解説し、共和党指導部の期待の星だったキューバ系マルコ・ルビオ氏の登場と撤退の背景を詳しく説明した。共和党のモデルチェンジ、アメリカ民主主義を支える二大政党制の行方にも論点は広がった。専門の米国・キューバ関係についてもオバマ大統領のハバナ訪問直前だったため、多くの質問が出た。

司会：中井良則 日本記者クラブ専務理事

Youtube のリンク

<https://www.youtube.com/watch?v=-toJZC8Mo04>

©公益社団法人 日本記者クラブ

司会（中井良則・日本記者クラブ専務理事）

今年アメリカ大統領選挙の年であり、日本記者クラブは、「変わるアメリカ・変わらないアメリカ」というシリーズ企画を続けております。きょうはその3回目で、お招きしたのは上英明（かみ・ひであき）さんです。

お若いというか、31歳の新進気鋭の研究者でありまして、東京大学で勉強して、その後、アメリカに留学しオハイオ州立大学で博士号を取られて、ことしの1月に帰国されたばかりです。アメリカとキューバの関係をテーマに博士論文を書かれたと聞いております。4月からは神奈川大学で教えられるということで、お話を聞くのを楽しみにしております。

アメリカの大統領選挙の中でも、きょうのテーマは「ヒスパニック＝ラティーノ」です。今週あったフロリダの予備選では、共和党のマルコ・ルビオさんが負けて撤退しましたが、そういったことを中心にヒスパニックとアメリカの政治をめぐる話をさせていただきます。

50分から60分ぐらい話をしてもらって、その後は質疑応答に充てます。よろしくお願いたします。

ヒスパニック＝ラティーノ社会で注目したマルコ・ルビオ上院議員

上 英明 ありがとうございます。ご紹介にあずかりました上英明と申します。本日はこのような機会を下さいますことありがとうございます。

日本記者クラブで話すのは初めてですし、それどころか、日本で日本語で話すのは5年ぶりぐらいになります。最後に報告をさせていただいたのは、日本アメリカ学会ですが、そこで私がたまたま扱っていたのがヒスパニック＝ラティーノ社会で、とりわけ注目していたのが、当時フロリダ州の上院議員となったばかりのマルコ・ルビオという人でした。

まさか、日本に帰ってきて最初にこういう機会を与えられて、話すことがその話の続きになるとは思っておりません、奇遇だなと思っております。

私の専門は、アメリカ政治外交史ということになるのですが、一番得意とするのは、いまご紹介がありましたように、米・キューバ関係の歴史です。なぜアメリカ合衆国がキューバと半世紀にわたって対立することになったのか、なぜいままで関係が改善されなかったのか、こういったことについて研究していました。

ただ、その話を考えていくと、どうしてもフロリダ州、マイアミに多く住んでいるキューバ系アメリカ人、こういった集団を考えなくてはいけない。その延長で、ヒスパニック＝ラティーノ社会、これを考えようとして研究を続けてきたと申し上げておきたいと思います。

今回のテーマが「変わるアメリカ・変わらないアメリカ」ということでして、米・キューバ関係も、オバマ大統領がついにキューバに訪問することが近づいてきておもしろいところなのですけれども、ヒスパニック＝ラティーノの社会について話してみたいと思います。

話の前半、移民国家としてのアメリカを考えてみたいと思います。少し歴史的背景を取り上げてみますが、当然、移民の受け入れが進んできた中で出てきたネイティヴィズム——日本語では「排外主義」と訳されます——この現象に注目します。

このあたり、もうすでにご存じの方が多くかと思いますが、話の後半とかかわってきますので、少しご辛抱いただきたく存じます。

話の後半では、本題に入りまして、ヒスパニック＝ラティーノと呼ばれた人々、彼らに焦点を当てます。彼らの存在が増していく中で、われわれが知っているアメリカの社会、アメリカの政治、こういったものがどうやって変わっていくのか、これについて考えたいと思います。

そして、この話の延長で、2016年大統領選挙について、いままでとは少し違った見方をしてみたいと考えています。

昨今の報道では、「トランプ現象」というのが取り上げられていまして、この研究会でもポピュリズムあるいは反知性主義、こういった角度から議論があったかと思えます。私もYouTubeをみさせていただいたんですが、トランプ現象について鋭く分析されていらっしゃるかと思えます。それについてどうのこうのということを私のほうから申しあげることがは

ないのですが、少し見方を変えてみようかなと思います。

トランプがなぜここまで強いのかという問題です。それは、トランプと対峙してきた共和党主流派がなぜここまで弱いのか、これをみていくことも大事なのではないかと思います。

その関係で、トランプもそうですが、共和党主流派との関係で、共和党がどのようにヒスパニック＝ラティーノ社会へのアウトリーチ―「働きかけ」と訳しますが―そういったものをしてきたのか、あるいは、主流派のホープと言われましたマルコ・ルビオを取り上げていきたいと思います。

少なくともなぜ主流派の期待がこのキューバ系の政治家に集まったのか、そして、ヒスパニック初といってもいいでしょう、有力な大統領候補が出てきたわけですが、それがなぜ民主党からではなくて、共和党から出てきたのか、そして、そのルビオがトランプに勝てなかったこと、これが何を意味するのか、こういったことだけでも、いただいたお時間の中で、私なりにお伝えすることができればと考えております。

移民国家という自己認識

まず、アメリカが持っている移民国家という自己認識について考えたいと思います。移民という言葉が、アメリカとは何かを考えるうえで非常に重要なテーマであったことは間違いないでしょう。しばしば言及されることですが、歴史的にアメリカには多くの移動する人々が入ってきて、先住民を除く多くの人々が、あるいはそういう人々を祖先にする人たちがその多くを占めた社会をつくってきた、そういう国であったと言われていています。私たちとしても、自由の女神のような移民国家アメリカを想起させるようなイメージを抱くことが多いかと思えます。

ただし、少し視点をずらして考えると、国家の構成員のほとんどが移民であるという点で言えば、南アメリカのほとんどの国、キューバ、あるいはアルゼンチン、こういった国々では先

住民はほとんどいませんから、絶滅してしまったようなところですから、そういう意味では、アメリカ合衆国よりも移民国家であったと言っても過言ではないと思います。

また、アメリカでも、移民排斥の問題がありました。アメリカの歴史には、移民の受け入れについて、国籍だとか、あるいは人種を理由に彼らを受け入れない、こういった事例が多くあります。例えば1924年、非常に重要な移民法が通過していますが、これ以降、それまで大量に入ってきた移民がなかなか入ってこれなくなる、移民の規制、排斥がいよいよ本格化していく、こういう時代もあったと思います。移民に対して門戸を閉ざすことがあったとすれば、その国は本当に移民国家だったのか、このように問い直すこともできるのではないかと。

したがって、ここで、有名な歴史学者であるオスカー・ハンドリン(Oscar Handlin)を取り上げたいと思います。彼の著作で非常に有名な作品ですが、『根こそぎにされた人々(The Uprooted)』というのがあります。この本は1951年に出版されて、翌年にピューリッツァー賞を獲得したものです。現在の移民史の研究者の間では、この本の登場をもって移民史(immigration history)という新しいジャンルが開拓された、そういうふうにも言われております。

そして、彼の本は、当時、移民法を改正すべきではないかという議論があったのですが、そういった議論にも強い影響を与えた、このように言われております。

この本の特徴として重要なのが、移民をいわゆる近代化の犠牲者として描く点でした。ハンドリンによれば、移民というのは急激な社会、経済の変化によって故郷で生活できなくなった人々が入ってくる、そういったものである。彼らは持てるものを全て失い、自分ではどうしようもできない力によって、土着の社会から根こそぎにされた人々なのである。

彼によると、こうして孤独となった人々が一人また一人とアメリカに入ってきて、新しい文化、新しい生活、新しい環境になじもうとしても、なかなかそれがうまくいかない。逆に古い文化、古い生活習慣、古い信仰とかを持ち込もうとするんですが、それもやはりアメリカとい

う新しい社会においては、そのままの形で維持することができない。つまり、ハンドリンによれば、移住というのは悲劇だったわけです。

ただ、この副題がすごいのです。この副題をごらんください。“The Epic Story of the Great Migrations that Made the American People”、これは簡単に訳しますと、「アメリカ人民をつくった偉大なる移住の荘厳たる物語」、こういった感じになるでしょうか。非常にもったいぶった内容です。ここにはハンドリンの強いメッセージが込められているかと思います。

彼によりますと、アメリカをつくったのは、ほかでもない、こうした悲劇の移民たちであるというわけです。移民たちというのは、苦難に耐えて、自分たちの成功はなかったとしても、何とか子孫だけは残してきた。そして、この子孫が、今のわれわれ、アメリカ人民である、アメリカンピープルである、だとすれば、アメリカンピープルはこうして出てきたわけであるから、アメリカという国は移民国家である。

こうしてハンドリンは、われわれアメリカンピープル、アメリカン人民は移民によって誕生した、こういうイメージを非常に強く印象づけた、というふうに言えるでしょう。

アメリカンピープルは移民によって誕生した——ハンドリンのイメージ

それでは、なぜ、これが人気を博したのか、受け入れられたのか。当時のアメリカ、1950年代のアメリカについて、少し振り返っていただきたいと思います。

先ほど申しあげましたが、1924年の移民法の制定以来、アメリカへの移民は実は大幅に減っていた。全米人口に占める外国生まれの割合は史上最小で、わずか5%に満たないのです。ですから、この移民国家というイメージは、ある種のノスタルジア、過去への郷愁を伴っていたかと思います。つまり、消えかかっているからこそ美化されていく、そういう記憶だったわけです。

それから、当時のアメリカの豊かさがありません。第二次世界大戦で勝利した後、アメリカは富裕な社会を築いていく。アメリカ人の間の社

会格差も比較的縮小していく傾向にありました。その中で、移民の子孫たち、ある程度社会上昇を果たしていくわけですが、アメリカ人たちは、アメリカが豊かさを享受するようになった理由を過去の歴史に求めることもできたわけです。

また、公民権運動が盛り上がりを見せますように、少しずつですが、人種、国籍、それに基づく差別への反対の声も出てきた。1924年、移民法があからさまな人種、国籍に基づく差別、これがあったわけですから、当然これも改正させるべきではないか、という議論も出てくるわけです。

それから、冷戦という状況もあったでしょう。アメリカは、ソ連のような共産主義国家、抑圧的かつ閉鎖的な社会と攻撃していたわけですから、その裏返しとして、自分たちの社会は民主的、あるいは開放的な社会である、そう世界に訴えるわけです。だとすれば、当然、移民の受け入れについても見直しが必要となる、移民を受け入れるアメリカこそが豊かで、美しく、そして強い社会である、このような自己認識が重なることによって、ハンドリンの議論を受け入れる下地が当時のアメリカにはできていたのではないかと。

こうして、1965年に新しい移民法ができて、新しい移民管理システムが登場し、再びアメリカに流入する移民の数が大幅に増加していくこととなります。

しかし、ここで着目すべきは、そのハンドリンが描いた移民と、こうして新しく入ってくる移民たちには大きな違いがある、矛盾が生じていたという点です。

重要な点を2つ挙げますが、1つ目は、ハンドリンが描いた移民が、あくまでヨーロッパからの移民だったということです。ハンドリンの物語には、非白人の移民というのがほとんど登場しない。ところが、1965年以降に大量に流入してきた移民たち、アジア、アフリカ、そしてとにかく中南米、中南米、中南米ですから、これは当時、65年移民法を支持していた人たちにとっても、これほど入ってくるのか、そういう意味では想定外のことだったかと思いません。

2つ目は、ハンドリンが移民をあくまで個人

の物語として描いていたことでしょう。そこでは、移住というのは、個人が自分の判断でアメリカに入ることが想定されていました。ところが、実際に移住というのは、いま昔も家族、こういったつながりによっても連鎖する事象である。もちろん、自分の能力を生かしたいとってアメリカに入ってきた人も多いでしょう。しかし、実際には、誰がどうやって彼らを導き入れるのか、どうやって入ってくるのか、家族やコミュニティの役割もあるわけですから、移住は個人の判断でもありながら、また集団のつながりにも頼るものである。にもかかわらず、ハンドリンが想像した移民は、あくまで個人であったわけです。

移民がふえると、移民に反対する人々は、このギャップをたたきます。移民に反対する人々は、移民は個人として入ってくるのではなくて、集団として入ってくる、こういうことを言うわけです。実際に移民は、個人でもありながら、集団でもあるわけですが、どちらの面を強調するかによって立場が逆になっていくことがあった。

そして、これは次のネイティヴィズム、あるいはヒスパニック＝ラティーノのことを考えるうえでも非常に重要な点ではないかと思えます。

移民国家と相反するネイティヴィズム (排外主義)

このネイティヴィズムというのは、日本語では「排外主義」と訳されますが、歴史家、ジョン・ハイアム (John Higham) によりますと、このように定義されます。「外国との関係があるという理由をつけて国内のマイノリティを激しく攻撃する態度」、こういうふうに言われます。

ハイアム自身は、特に 1860 年から 1920 年にかけて、合衆国でこのような態度が少なくとも 3 つの形態をとってきた、そういうことを指摘しているのです。反カトリシズム、反ラディカリズム、そしてアングロ・サクソン中心主義、こういったものでした。

ただ、いずれにしても、このネイティヴィズムは、アメリカ社会が自信を失っている時代にお

いて顕著にあらわれる一種の病理現象、シンドロームだったわけです。暮らし向きが悪い、いつまでたっても改善されない、その不満をどこに向けていいかわからない、そういうときに、移民や少数派といった国内で目につく人々をたたくわけです。それは一見すると、攻撃的な形態をとる、しかし、実際にこの症状を歴史的に診断しますと、それは一種の心理的な防衛行動でもあったわけです。

目にみえる形で敵をつくってたたくという行為は、そうでもしなければわれわれという意識がつくれぬ、そうでもしなければ一致団結して自信を回復することができない、という意味にもなります。それは、彼らとわれわれの境界をつくって、何とかして安心を得ようとする行為であります。

ですから、ネイティヴィズムというのは、いわば追い詰められていく人々の間で出てくる傾向がある。このネイティヴィズムが移民国家アメリカのイメージと相反することは明らかでしょう。ハンドリンが描く移民は、あくまで個人です。彼らが持ち込む故国の文化もやがて自然に消滅していく運命にある、したがって、移民は集団としては存続し得ないというふうになるのですが、ネイティヴィズムは移民個人ではなく、集団として捉えますから、彼らにとって、その集団はいつまでたっても危険な存在なわけです。ですから、誰かが、メキシコ人はレイプ犯だとか、麻薬常習犯だとか言うと、拍手喝采が起きるわけです。

トランプ現象とネイティヴィズム

また、移民国家アメリカのイメージでは、アメリカは世界に対して開かれた社会であります。ところが、ネイティヴィズムの世界においては、そのようなイメージはありません。逆に、新しく入ってくる移民たちを食いとめることに必死で、移民たちとの間に何とか境界線を引こうとする。したがって、誰かがメキシコとアメリカの間に万里の長城を築くとか、そういうことを言うと大喜びするわけですね。つまり、こういったメッセージを流して一躍時の人となったのが共和党、いま大統領候補となっているトランプ氏だったのではないかなと思いま

す。

ただし、トランプ現象というのは、ハイアムの言うネイティヴィズムとは若干異なる点もあるかと思いますが。確かにネイティヴィズムと同様に、トランプ現象もアメリカ社会に対する自信の喪失、これを背景としているとは思いますが。「アメリカを再び偉大な国にしよう」、こういったトランプ氏のスローガンがありますが、裏を返せば、いまのアメリカが偉大な国ではない、なくなってきた、これを暗黙の前提としているわけですね。「再び」というぐらいですから、いまは違うわけです。

そして、そうなった理由として、アメリカではないとされる人々をたたき。あるいは外国と関係させて、いわゆる「われわれ」の世界から「彼ら」を追いやるわけです。非常に単純に言えば、偉大な国アメリカというのは、外の連中が悪いことをしているからだめになった、その悪い連中をたたき、追い出せ、入れるな、このようなメッセージの内容に着目すると、トランプ現象、かつてのネイティヴィズムそのものとして捉えることはさほど難しくはないでしょう。

しかし、かつてのネイティヴィズムとは違うところもあるかもしれません。ネイティヴィズム、その定義からして、外国と関係のある国内の少数派をたたきというものです。ですから、主流派、ネイティヴィズムというのはみずからが多数派になっていくことを言います。

しかし、今日のネイティヴィズムに従う排外主義者たち自身が実は少数派にとどまっている。これが移民規制法を制定していた1920年代と大きく違うわけです。これだけ外国人生まれの人々がふえていても、かつてのような移民規制法案が連邦レベルでは通らない。

また、ほかにもネイティヴィズムの例として、英語単一運動などがあるのです。アメリカでは英語だけを話さなくてはならないというのを訴える運動ですが、1980年代、あるいは90年代で大きな盛り上がりを見せた。ところが、スペイン語を使う人たちは減るところかますますふえている。

90年代には、カリフォルニア州で幾つかの移民を標的とした住民提案が出てきました。これは英語単一運動とも通じたものですし、ある

いは合法移民、福祉行政サービスへのアクセスを制限する、こういった内容だったと思います。しかし、それらもことごとく最高裁ではねつけられた。それどころか、こういったものを推進したカリフォルニア州共和党は壊滅的なダメージを受けるわけです。

こうしたことからわかりますように、現代のアメリカ社会では、ネイティヴィズムへの免疫力、こういったものもある程度働いているのではないかと。

なぜかと申しますと、一つには、1960年代以降、特に顕著にあった公民権運動、文化的寛容の態度、差異を肯定する態度、こういったものが少しずつ定着をみせてきたこともありま

す。人種、国籍を理由に差別することに対して、メディアの啓蒙活動や学校教育、一定の抑制をかけてきていたわけです。それから、経済の要請もあるでしょう。南西部の農場経営とか、中西部の加工肉産業、あるいは都市のサービス業、こういったところでは、安価でもよく働く移民労働力が不可欠とみなされるようになった。ですから、経済界にいる保守派の人たちも、移民排斥にはなかなか同調してこない。

さらに、外交の都合もあるかもしれません。現在のアメリカは、世界的指導力を発揮することを期待されていますし、またアメリカも相互依存の世界では自分たちだけでやっていくことに限界がある、そういった形で世界との関係を考えると、移民たたきにしろ、外国たたきにしろ、不利益が生じてくることは目にみえている。

つまり、文化や経済、外交といった観点からみると、少なくとも主流社会においては移民排斥には加担しない、こういう意見の一致があったかと思いますが。こういった事情のために、過去半世紀にわたってネイティヴィズムはますます孤立を深めてきたのではないかと。

ところが、暮らし向きが悪く、自分たちが理解されないことにいらだちを覚えると、怒りのあまりに再びその力が出てくることはある。それで、抑制がきかなくなってくると、ネイティヴィズムというのは主流派に対する反撃という形もとるわけです。したがって、現代のネイティヴィズムは、非主流派にとどまっているが

ゆえに、攻撃の対象が移民少数派だけでなく、アメリカの主流派社会にも向かうわけです。

共和党とヒスパニック＝ラティーノ 2012年報告書

さて、ようやくヒスパニック＝ラティーノ社会の話に入りますが、まずは2012年、大統領選挙の後に共和党がつくった報告書を取り上げたいと思います。

これは「成長と機会」というタイトルがつけられていて、いかにも共和党らしいのです。この文章の起草者は、いわゆる共和党の主流派と言われる人たちでありまして、2012年の大統領選挙はご存じのように、ミット・ロムニーという人が出てきて、バラク・オバマに負けた、そういう選挙でした。

この敗戦を受けて、共和党の主流派の人たちは、どうして負けたのか、次に勝つためにはどういったことをしなければいけないのか、こういったことを真剣に考えたわけです。非常に大規模な調査、インタビュー、データの分析を行ってまして、その結果として幾つかの重大な警告を発したわけです。

とりわけそこで目を引くのが、将来の人口動態に関する分析のところですね。レジュメで挙げた英語の部分、そこから引用したのですが、こういったことを言っているのではないのでしょうか。国家の人口動態が変化していることをみて、われわれ共和党の立場がいかに危険であるかを悟らなくてはならない。われわれ共和党の魅力を増大しなければ、この人口動態の変化はますます民主党に有利な状況を生み出すだろう。

ここで言う人口の変化ですが、一つは若者です。若い人の中では、どういうわけか民主党支持が強まっている。これに共和党は気づいたわけです。

ところが、この報告書が若者よりも重視したグループ、これがヒスパニック＝ラティーノであった。報告書では、ピュー・リサーチ・センターという研究機関の出している報告書、これがまた引用されるわけですが、お手元のレジュメの5ページです、参考資料1というものがある

ります。そちらを一度ごらんください。

そのレジュメ5ページの上半分にありますのが、集団ごとの人口変化と将来予測です。これがピュー・リサーチ・センターの行った分析でして、1960年、2011年、そして2050年に予測される全米人口に占める人種集団ごとの人口の割合です。一番左、ホワイト、つまり白人です。ヒスパニック系でない白人を指しています。ごらんいただきますように、1960年、いまから50年前では、全米人口の85%を占めていた。ところが、2011年、最近になるとそれが63%まで低下して、さらに2050年までに47%、何と半分を切ってくる。

一方、左から2番目、ヒスパニック＝ラティーノ、ここですが、1960年には3.5%だったところが2011年では17%、さらに2050年には何と29%に達するかもしれない。この29という数はとてつもない数で、33に近いわけですから、大体3人に1人という数になっていくわけです。このことに共和党指導部が危機感を抱くというのは無理もないかもしれません。

2012年の大統領選挙で共和党候補のミット・ロムニーがヒスパニック＝ラティーノ票のうち獲得したのは24%だった。このままいけば、民主党が有利になることは誰がみても間違いないわけです。共和党としては、この集団を取り込むための努力が必要で、そのために当然何かしなければいけない。この報告書の成果として、共和党はそのような考えに至ったわけです。

世代や出身国による多様性があるのに、外部からの攻撃によって逆に定義される集団

さて、そのヒスパニック＝ラティーノ票が将来において極めて重要な役割を担うだろう、こういう考えは別に新しいことではありません。政治アナリストの間ではよく言われるようになりまして。しばしばヒスパニック＝ラティーノ集団は「眠れる巨人 (sleeping giant)」と呼ばれるわけです。つまり、いまはまだ眠っていても、いつかはその潜在的力が覚醒するだろう、こういうふうな形容をされるわけです。

ただし、このような呼び方には注意が必要です。まず、しばしば日本でも誤解が生じやすいところですが、ヒスパニック＝ラティーノというのは決して一枚岩ではありません。確かにメキシコ系が6割強を占めますが、メキシコ系＝ラティーノという考え方は間違いです。中南米の多様性や、その歴史的な文脈を無視するということになります。

これは簡単に言わせていただければ、アジアにあるからといって、日本も韓国も中国もフィリピンもみんな同じだ、という議論とあまり変わりがないわけです。

また、世代の問題があります。これは非常に複雑です。もう一度レジュメ5ページの参考資料1のところに戻っていただきたいと思います。このレジュメ5ページの下半分に、ある世論調査の結果を載せさせていただきました。後の質疑応答で、——私の回答は拙いものかと思いますが——その間にでもこちらをゆっくりとみていただいて、楽しんでいただければと思います。

要するに、同じヒスパニック＝ラティーノだといっても、世代ごとに社会経済や文化の指標に重要な差が出てくるわけです。こういった指標をもとに、さまざまな投票行動をこの集団の中で予測することは十分可能かと思われまます。ですから、このヒスパニック＝ラティーノという言葉は非常に慎重に使わなければならない。

ところが、ここでネイティヴィズムの話が出てくるのです。ヒスパニック＝ラティーノの間にある多様性にもかかわらず、彼らを攻撃する人々にとって、彼らは個人ではないのです。集団としてみている。市民権を持っている人から持っていない人、合法的に移民した人からそうでない人、アメリカに来たばかりの人から、ずっと先祖代々にわたって住んでいる人、さまざまな個々の事情があるにもかかわらず、ネイティヴィズムというのはわれわれではない、彼らとしてくっってしまう。

したがって、ヒスパニック＝ラティーノは、その内的多様性がありながらも、外部からの攻撃によって逆に定義される集団でもあったかと思えます。そして、このような攻撃にさらされる可能性があるという点で共通の見解が出てくる。それが広く定義されるところの移民問題ではないか。

さきにネイティヴィズムの例として、英語単一運動を挙げました。これはどこで最初に起こったかといいますと、実はほかでもないフロリダ州マイアミです。当時、キューバ人といえば、メキシコ人と違って、アメリカに入ってくれば政治難民として扱われていたわけです。つまり、同じ中南米出身であっても、全く扱いが違っていた。ところが、英語しか話さない人たちがいらだちを覚えて、スペイン語を話す人たち全体を攻撃するわけですから、結果として、それはキューバ系だけでなく、キューバ系以外の人たちを巻き込んでいったということになります。

また、少し前に話題になりましたのが、2010年、アリゾナ州法でしょうか。これは、非合法移民を取り締まることを目的に、警察官が滞在資格を証明する文書の提示を求める、こういった内容があったと思います。ところが、これは実際に運用されると、あいつは見た目からして非合法移民に違いないから、とりあえずとめてみようという話になっていくわけで、そうすると、実際に非合法で入ってきていない人たちも含めて、そういったターゲットにされてしまう。これは非合法移民でなくても嫌なわけです。誰だって警察にいきなりとめられるのは嫌ですから、そして、こういったことがヒスパニック＝ラティーノの間で反感を生むことになっていく、そういうダイナミクスがあったのではないかと思います。

このように、ヒスパニック＝ラティーノというのは複雑な集団ではあります。共和党指導部は、こういった集団をまとめてしまうのではなくて、個々にアピールすること、そこで民主党の地盤を少しずつ切り崩していくこと、こういうことを考えるわけです。

先ほどから申しあげていますように、多様性はある、確かに割と教育だとか医療、環境、格差是正、こういったところでは政府の積極的役割を望む声はヒスパニック＝ラティーノの中でもかなり大きい。しかし、だからといって、ヒスパニック＝ラティーノも決して一枚岩ではないわけですから、共和党としても何とか切り込んでいかなければいけない。

1980年大統領選のレーガン・キャンペーン

ここで重要になってくるのが、共和党がそれまでヒスパニック＝ラティーノにどのような

働きかけをしてきたのかという点でしょうか。もともと共和党がこの中南米系人口の潜在的な力に着目したのは、1970年代までさかのぼります。ただ、実際に活発的な動きをみせたのが、1980年だったと思います。ロナルド・レーガンの選挙です。大統領選挙のキャンペーンを前に、レーガンはカリフォルニア州の知事を務めたことがありますから、自分ではラティーノのことをよく知っていたと自負していたわけです。

そこで、非常に有名な言葉を残していますが、このようなことを言っています。「ヒスパニックは共和党員だ、ただ、彼らはそれを知らないだけだ」。レーガンによりますと、家族への献身とか勤労の態度、国を愛する態度、それから信仰、こういった価値観において、共和党とヒスパニックは一致することが多い、こういうわけです。ですから、これが割と基本的なフレームワークになっていって、共和党としては、政策の利害の一致というよりは、むしろ価値観の一致、こういったものを訴えていくことになり

ます。80年代の共和党によるヒスパニック・アウトリーチはこのように始まったわけですが、その最大の成果はどこで生まれたかという点、それはフロリダ州だったわけです。ここでは、先ほど触れましたように、キューバ系が多い。ところが、このキューバ系の多くは、1959年のキューバ革命、この混乱から逃れてきた人が多いわけですから、あのフィデル・カストロを恨んでいる、共産主義が嫌いだ、レーガンはここに注目して、反共イデオロギーを全面に掲げて乗り込んできたわけです。

共和党とフロリダ州のキューバ系

そして、共和党が展開したキャンペーン、これの現場指揮をとっていたのが、皆さんご存じのジェブ・ブッシュです。ジェブ・ブッシュは、当時副大統領候補であったジョージ・ブッシュの息子だったのですが、当時、大学を出たばかりで実績はないわけです。ところが、スペイン語ができる、それから奥さんをメキシコでつけてきたくらいですから、ラテン系の文化は好きなわけで、マイアミに移ってきた。そのジェ

ブがキューバ系と手を組んで、政治的キャリアを積み重ねていったわけです。

フロリダでキューバ系が共和党支持に転換していくということは、幾つか特別な意味を持っていたかと思います。1つは、外交問題への影響で、米・キューバ関係が停滞する極めて重要な要因となったかと思います。このことはまた別の折りに報告させていただくことになるか

と思います。2つ目は、共和党にとってキューバ系がかけがえのない勢力として成長していったことです。フロリダというのは、南北戦争の時代からもともと南部共和党の地盤です。ところが、冷房の普及、第二次世界大戦の後、冷房が出てきて、そうすると、暑くても何とか生きていける、こういった人たちが北部から流れてきた。それから南部からの移民、この場合はキューバ系が多かったわけですが、これが共和党支持に変わっていく。こうしてフロリダ州は共和党と民主党が激しく競る、そういう州になっていきます。

3つ目は、大統領選挙への影響です。フロリダ州というのは、オハイオ州と並んで、おそらく近年の大統領選挙で最も重要な激戦州の2つのうちの1つだったか

と思います。例えば、2000年の大統領選挙、これはわずか537票差でジョージ・W・ブッシュが勝つわけですが、フロリダで勝ったことが大統領になるということになった。数十万単位で動いたキューバ票がその勝利の功労者としても認められたわけです。

もう一つ、つけ加えますと、共和党が民主党からヒスパニック＝ラティーノ票を奪うことが不可能ではない、こういった自信を強めたこともあるか

と思います。こうして出てきたのがブッシュの選挙参謀役を務めたカール・ローヴたちです。彼の指導もあって、2004年大統領選挙でブッシュは、ヒスパニック票のうち、何と4割も獲得した。これがかなり驚きを持って伝えられました。ただ、これは共和党が変わったというよりは、あくまでも候補者の強みを生かした結果だったか

わけです。

ところが、2008年選挙、2012年選挙では、このブッシュ兄弟の成果が消えていく。ヒスパニック＝ラティーノをたたき運動、2005年ですか、共和党下院議員がかなりやっていますし、その反動で、全米150都市で大規模なデモが起きた。これでまた共和党のイメージが悪化していったこともあります。

また、2012年大統領選挙で、ミット・ロムニー、予備選を勝ち抜くために、「自発的追放」ということを言っていました。これはどういうことかということ、非合法移民を取り除くためには、要は連邦政府が何かするよりも、彼らがアメリカで過ごしている生活を厳しいものにして、そうすれば、彼らは自発的にアメリカから逃げていくだろう、だから、自分たちで勝手に自分を追放するだろう、こういうことを言っていたのです。これは非常に無茶な議論で、移民反対派の多い共和党が予備選を勝ち抜くためには必要だった。しかし、そのロムニーも、本選では逆にそのことをオバマにたたかれて、結果、ロムニーはヒスパニック票のうち24%ぐらいしか取れない。これではだめだというのが、この選挙を総括した共和党指導部の結論だったと思います。

期待を集めたマルコ・ルビオ

こうした状況において、共和党指導部の期待を集めたのがマルコ・ルビオという人でした。ルビオは、ことし大統領選挙に出てきましたので、日本でも主流派のホープとして紹介されていたかと思います。

もう一度、ここで彼の経歴をみてみましょう。ご存じのとおり、ルビオはキューバ系移民の二世です。1971年にフロリダ州マイアミで生まれます。父親はバーテンダー、母親はレジ打ちとかをやっていました。労働者階級の出身なわけです。子どものときから政治に興味があったらしく、13歳のころ、父親の労働組合がストライキを起こすと、ルビオ少年も参加して、会社が雇ったスト破りと闘っているらしいです。

それについて彼は、こう述べています。「あのころ、私は全ての問題について理解していな

かったが、ストを起こした労働者たちは、ただただより公平な待遇を求めている、こういうことはわかっていた。そういうわけで、私は熱心な労働組合の活動家となったのだ」。

ですから、ルビオ少年、放っておけば労働組合のリーダーか民主党の政治家になったかもしれません。ただ、彼はレーガンが好きだったのです。というのも、そのレーガンがキューバのフィデル・カストロを事あるごとに攻撃しているわけですから、その意味で、彼自身が、先ほどから申しあげている、共和党によるヒスパニック・アウトリーチの産物であった、こういうふうにしらべても大丈夫でしょう。

これ以降、彼は自分でも、レーガンの後継者であるというふうに言うようになります。こうしてルビオは1997年に共和党員として政界に入っていきますが、非常に速いスピードで出世していきます。

最初は、人口わずか5,000人ほどの西マイアミ市の市会議員です。その2年後にはフロリダ州下院議員となります。2006年には史上最年少でフロリダ州下院議長になるわけですが、2010年、フロリダ州上院議員となります。当時の報道では、ルビオ、例のティーパーティー（茶会）運動が支持する候補として取り上げられたかと思えます。確かに、茶会の間では人気があった。しかし、ほかの茶会候補と比べて、ルビオは市会議員からステップアップしているわけですから、決して政治の素人ではなかったわけです。むしろ、ヒスパニック＝ラティーノ出身でありながら、それとは全く別のグループである茶会の支持も得られた、こういうわけで彼に対する期待が高まっていたように思います。市会議員から上院議員までたった13年ということで、非常に速い。当時39歳でした。

マイノリティ出身をプラスに変えたルビオ

それでは、少数派集団出身のルビオがなぜここまで急速に台頭したのか。その理由の一つは、彼が少数派集団であったことをプラスに変えていったからではないかと思えます。そもそも、エスニックマイノリティ出身の政治家というのは、選挙ではどうしても不利になるわけです。なぜなら、マイノリティの利害を代表している

限り、マジョリティーの支持を得ることはないからです。キューバ系が政界に進出し始めたときは、1980年ぐらいですから、彼らはしばしば、「キューバ人はキューバ人に」というスローガンを訴えていました。しかし、これではキューバ人以外の反発を買いますし、キューバ人が少数派である限りはこういった候補はなかなか勝てないわけです。

そこで、マイノリティ出身の候補は、どうにかしてマイノリティの外の世界にも訴えていかなければならない。では、どうするか。方法は大きく分けて2つあるかと思えます。

1つは、自分のエスニシティを消すことです。スペイン語を話せても、人前では極力話さない。気づかせない、意識させない、こういうわけです。これによって、みずからのエスニシティが無害であることを証明し、マジョリティーの支持を取りつけようとしています。英語ではパッシングと言うのですが、アメリカの歴史をひもとけば、そういう人は割と珍しくはない。現代において、1人例を挙げろと言われると、おそらくテッド・クルーズを挙げることができるのではないのでしょうか。

このクルーズという人は、一応キューバ系だと思います。しかし、彼自身はそれについてあまり多くを語らないわけです。わずかにバイオグラフィーで、さすがに自分の父親を紹介しすから、キューバ系のことを書くのですが、しかし、移民問題では非常に強硬な立場をとり、まるで自分とは関係ないかのように話しているわけです。ですから、時々、報道でさえ、彼がキューバ系であることを忘れてしまう。彼が大統領候補になっても、ヒスパニック初かなどということあまり言われたいわけです。そのかわり、彼は宗教右派とか、反移民団体の支持を得ることができる。ある種のトレードオフになっているわけです。

しかし、ルビオはクルーズと違います。徹頭徹尾彼はキューバ系であること、マイノリティ出身であることをアピールする。なぜか。この点を理解するために、彼の演説を一つ取り上げます。レジュメ6ページです。参考資料2をごらんください。

これは2010年、ルビオが全米の有力保守団体が一堂に会する保守政治行動会議（C P A

C）、これで基調演説者として登壇したときのものです。その演説を一部抜粋させていただいておりますが、時間の関係で、ハイライトしているところだけ取り上げます。

まず、ルビオは、「アメリカが偉大なのは、他の場所では不可能な夢がここでは可能になること」だと言うのです。ルビオの両親は革命キューバを逃れて、英語も話せず、お金もつてもないままアメリカに来た。しかし、彼の両親は、とにかく子どものために一生懸命働いた。そして、ルビオの成功は、こうした両親の犠牲と神の恩寵と、アメリカ合衆国という特別な国のおかげで達成されたのだ、ということを行うわけです。

それでは、なぜアメリカが特別なのか。ルビオによると、それは先人たちが自由な社会に生きることを選択したからであり、それは先人たちが自由な企業活動を選択したからだ、と言うわけです。そして、彼によると、オバマ政権というのは、その選択とは全く異なるものをアメリカ人たちに要求している。それに対し、ルビオはこのように問いかけます。「私たちは例外的でありたいのでしょうか。それとも、私たちは進んで世界の他の人々のようになりたいと思うのでしょうか」。

アメリカの保守派は、このようなルビオの演説に熱狂したわけです。しかし、ここでルビオがしていることは、単純明快です。彼はキューバ系であるがゆえに、キューバと対しながら、アメリカという国はいかに素晴らしいか語っているわけです。自分は多数派の人間ではない、しかし、そうではないからこそ、ほかではみえないことがわかる。このように語ることによって、人種とかエスニシティの差異、違いというのが、その違いを持たない多数派の白人たちにとって、不安を抱かせるものではなくて、逆に彼らを魅了するものとして提示されていく。人種やエスニシティの差異というのが、ある種のブランドのようなものになっていく。多数派に売り込むことができる、こういった戦術がルビオの中でとられていった。それが政党のモデルチェンジを模索していた共和党指導部のニーズと合致していたのではないか、というふうに思われます。

なぜルビオは撤退したのか

さて、それでは、なぜこのように登場したルビオが大統領予備選挙ではうまくいかなかったのか。ちょうど彼が撤退した後ですから、この点にも触れます。ルビオの限界は幾つかあります。まず、候補者としての未熟です。あまりに出世が速く、あまりに若い。討論会では集中砲火を食らいましたし、自分でも何度か致命的なミスをしています。

また、今回の予備選、主流派候補が多過ぎて混戦となりました。これは不利になるわけです。ルビオはジェブ・ブッシュ、クリス・クリステイを撤退に追い込むことは成功しました。しかし、ジョン・ケーシックは残りまして、主流派の票を分断されると、バージニア、こういった重要な州で勝利はつかめません。もともと選挙で勝てる候補として売り出されたことありますから、予備選でなかなか勝たない、これは相当なダメージになったわけです。

また、トランプを嫌々ながら攻撃したこと、これも裏目に出ました。もともと好感度が高い候補だったわけですから、こういう候補は、他候補を攻撃すると、自分の好感度が下がってしまうんですね。ですから、メディアへの露出も求めて、手の大きさがどうかこうとか言っていたんですけども、それは彼の焦りと未熟さのあらわれだったのではないかと。ですから、もともと特定の支持基盤を持たないルビオの選挙運動が、ある意味でルビオ一人のパフォーマンスに多くを頼っていたこと、これは彼にとっては非常に酷だったように思います。

ただ、ルビオへの支持が広がらなかった理由、ほかにもあるでしょう。最初に述べましたが、現代のネイティヴィズムはあくまで非主流派、少数派だったかと思います。しかし、そもそも共和党予備選では投票する人間の数が限られている。多くても有権者人口の1割、2割、3割ぐらいでしょうか。移民排斥を支持する人たちがそこに固まって動くと、絶大な威力を発揮するわけです。

そして、ルビオがみずから移民出身の候補と

して語っていたこと、トランプとクルーズがアメリカとメキシコの国境にどうやって壁をつくるか議論しているときに、彼が加わらなかったこと、そして、実際に上院議員のときに非合法移民の合法化を含めて、移民法改正の法案を起草、提案した過去もありますから、移民を追い出せと騒いでいる人たちがルビオのような人に本当に投票するのか、疑問もあったわけです。

そして、これも重要な点ですが、アメリカがいかによろしい国か、ルビオが説いても、ネイティヴィズムはそもそも社会への自信の喪失を背景にしているわけですから、ギャップがあるのです。彼が言いたいことと、聴衆が聞きたいこと、なかなか差が埋まらなかったのではないかと。今回、2016年においては、その前向きなメッセージは伝わりにくかったのではないかと、と思います。

最後に、今後の見通しについて、私は予想屋ではないですが、自分が考えているところを正直に述べたいと思います。

私は別にトランプ現象が単に移民排斥だけ出てきたとは申しておりません。しかし、トランプが台頭した理由、これはメキシコ人がレイブ犯だとか麻薬常習者と呼んだり、壁をつくと騒いだり、難民、イスラム教徒であれば入れたくないとか、中国、日本は為替操作国だとか、こういうことを言って拍手喝采を浴びた。主流派メディアがそれをたたけば、逆にトランプ支持者がふえる。こうした現象を総合すると、トランプ現象というのは現代のネイティヴィズムと重なってるところがあったかと思います。そして、ネイティヴィズムの台頭というのは、ほかでもなく、アメリカ社会の自信の喪失を意味しているのではないかと、考えます。

トランプの勝利——モデルチェンジに失敗した共和党

では、トランプが勝ち、ルビオが負けたことは何を意味するのか。端的に言えば、それは共和党が描いたモデルチェンジに失敗したことです。いま、ネイティヴィズムとは別に、もう

一つのトランプ現象というべきものが起きていくのではないか。それは、過去にあったように、トランプがたたいている移民集団からの反発です。すでに多くのスペイン語メディア、たとえばユニビジョン（Univision、スペイン語のテレビネットワーク）は、反トランプで論陣を張っていますし、ヒスパニック＝ラティーノを対象とする世論調査が最近出てきていますが、トランプへの反感 77%、あるいは 8 割、かなり高くなっている。

こうしたことから、共和党の未来、それほど明るくないのではないかなと思ってしまいます。移民たたきというのは、短期的には絶大な集票効果があります。しかし、それは必ず将来に禍根を残します。そういう意味で、いま私たちがみているのは、ひょっとすると、集票組織機関としての政党、共和党の自殺ではないか。

アメリカの民主主義に疑問も

もちろん、そうではないという意見もあるでしょう。ネイティヴィズムがますます広がって、白人労働者たちが大挙して共和党になだれ込む。あまり想像できませんし、想像もしたくないのですが、万が一にもトランプがヒラリーに勝つということがあるかもしれません。しかし、それはそれで危惧すべき現象でしょう。なぜなら、二大政党がますます人種、エスニシティの区分で分かれてしまう、これが起こってくるのではないか。そのままいけば、ネイティヴィズムの標的とされているマイノリティにとっては、ほとんど選択肢がなくなってしまうわけです。

アメリカは、自由な選挙と複数政党の競争をもって民主主義と自分で言っている国ですから、その国が特定の集団には一つの選択肢しか与えないとなると、それは本当に民主主義であるのか。このような疑問が出てきてもおかしくないでしょう。

時間を過ぎてしまいましたが、このあたりで一旦終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

〈質疑応答〉

司会 どうもありがとうございました。移民国家としてのアメリカから、今回の大統領選のマルコ・ルビオの敗因というか限界、最後に二大政党制の行方まで話していただきました。これから質問の時間にしたいと思います。

質問 数字をあげますので、その数字に関して、どういう解釈をされるかをお伺いします。フロリダの予備選挙の数字です。共和党は全部で 227 万 6,000 票ぐらい投票があり、そのうちラティーノは 16% です。実数にすると、36 万 4,000 ぐらい。民主党のほうは、投票総数が 166 万 4,000 票ぐらいで、20% がラティーノ、実数にすると 33 万 2,000 ぐらいです。

感覚的には、ラティーノは民主党を支持している人のほうが多いと思うんですけども、今回、投票所にやってきたラティーノは共和党支持者のほうが多かった。これはどういうふうにごらんになりますか。

それから、共和党の投票所に来たラティーノは全体の 16% で、民主党は全体の 20% です。これはあくまでも出口調査の数字ですが、それぞれの全体に占める割合をどうお考えになるか。何か解釈することができるかどうか。

共和党のラティーノのうち、ルビオに投票したのは 52%、トランプは 26% です。それについては、何かご見解はありますでしょうか。

共和党のヒスパニック・アウトリーチ

上 ありがとうございます。私が答えられる範囲で今回、答えさせていただいて、残り、宿題とさせていただきたいんですけども、まず、なぜ一般的には民主党員だと思われるヒスパニック＝ラティーノが、フロリダでは共和党が比較的多いのか、というお話だったと思うんですけども、これはレジュメで取り上げましたところ、共和党によるヒスパニック・アウトリーチのところですよ。

80 年代からかなり共和党が注目したグルー

プだったということが挙げられます。もともとはフロリダというのは、先ほど申しあげましたが、南部民主党の地盤です。ところが、人口が非常に大きくなってきた、非常に流動的になってくる、それが狙いどころになるわけです。新しい、そもそも南部フロリダには共和党の地盤などはなかったわけです。それが新しい人が入ってくると、先入観がないわけですから、何か新しい足がかりをつくるときに、非常に都合がよくなってくる。これで注目したのがヒスパニック＝ラティーノだったのではないかなと思います。

先ほど申しあげましたように、キューバ系が非常に多いです。キューバ系が、もともとは民主党支持のほうが多かったんですけども、やはり 80 年代ぐらいから、新冷戦といいますか、キューバとの対決ですね。ご存じかと思いますが、1979 年でニカラグア革命とか、中米の紛争が起こり、これはかなりフィデル・カストロもかかわっているわけです。カストロをたたけと言っていたのがロナルド・レーガンですから、このレーガンが自分の外交政策の延長で、キューバ系、フィデル・カストロに恨みを持っている人たちに働きかけていった。これが割と成功したんですね。

そうしたことがあって、その影響はいまも残っている、と考えてもいいのではないのでしょうか。一回、共和党に支持を変えてしまうと、そういった人たちが、もともと基盤がないところに新しい政党をつくっていくわけですから、後から来た人たちでも、かなり上のほうにステップアップできるのです。そうすると、キューバ系の出身の政治家がどんどん上がっていく。そうすると、キューバ系の出身の政治家がいるということで、また人が入ってくる。この連鎖反応が起きてくるわけですから、それがいまも共和党が多い一つの理由ではないかと思いました。

2 つ目は、ちょっと質問の趣旨を理解しているかどうか私わかりませんが、出口調査の結果で、16%、20%という数字がそれぞれ出ていて、これについて何かということかと思えます。

単純な話かもしれませんが、かなりふえてき

たなという印象を受けます。もともと、2008 年、12 年と、たしか大統領選挙の本選で、フロリダは差が大体 1% ぐらいですか、ものすごく競っている。これで、どちらの政党も、どうやってその 1% を取るかという話になるわけですから、ヒスパニック＝ラティーノがふえていることを受けて、ものすごいキャンペーンをやるのです。

特に、2012 年、大統領選挙で、オバマがものすごく頑張った。再選をかけてものすごい資金を投入して、フロリダではスペイン語メディアで広告を流しているのです。これは注目すべきで、こういった働きかけが出てくると、やっぱり動員される人の数もふえてきます。もともと英語をしゃべれない人たちも多いと、大統領選挙といっても、なかなか何をしたいかわからないというか、あるいはそもそも市民としてなれる資格があってもなっていないだとか、あるいは投票所へ行っても、どちらの政党がいいのか自分でもわからない、ということになってしまいます。そこで、ボランティアの人を動員したり、広告を流したりすると、これは莫大なお金がかかるわけですね。ただし、その結果として今回、より高い数字が出てきているのではないかなと思います。

3 つ目、ルビオ 52%、トランプ 20% ぐらい、これはほかの州と比べていただけのいいかと思えます。ほかの州で、ルビオはほとんど 10% ぐらいだったのではないですか。フロリダには自分の地盤があったということで、かなり頑張ったように思います。

オバマ外交の原理を後戻りさせないためオバマはキューバを訪問する

司会 次の方、どうぞ。

質問 一つだけ、短い感想を言わせてもらって、質問に移りますが、2014 年のオバマ大統領の一般教書演説が終わった後、すぐにルビオが全国放送に出てきて、共和党の反論をした。そのとき、内容が明快であった印象が残っているんですが、共和党が育ててきたということ

伺って納得ができました。

質問ですが、ルビオが日本に対してかなり関心を持っている。報道などによりますと、安倍晋三首相とも何回か会っている、尖閣諸島の領有権について日本の主張を支持している数少ない上院議員だったというんですが、ルビオと日本の関係はどういうものでしょうか。2点目の質問ですが、来週のオバマ大統領のキューバ訪問がどういう目的なのか、あるいは大統領選挙へどんな影響があるのでしょうか。

上 ありがとうございます。

ルビオと日本の関係ですね、あまりそういったことを書いている人がいないので、あくまで推測になってしまうんですが、単純に言ってしまうと、イデオロギーではないでしょうか。彼は、やっぱりキューバ出身というところから入ってきて、マイアミで育ってきた。当然、共産主義に対するものすごいアレルギー反応を持っている人だと思います。

アメリカの保守派の中でも、最も冷戦的思考が残っている人ではないでしょうか。外交委員会の中でも、多分彼は飛び抜けてそういう人だと思います。それがあって、例えばキューバに対する政策転換を絶対認めないとか、あるいは中国に対して、同じような見方をしているのではないかという気がしますね。

その裏返しとして、日本は民主主義国家であるとか、あるいはほかの国、韓国だとか、そういったところに支持すべきだとか、北朝鮮は嫌いですから、当然北朝鮮に対しては強硬な態度をとってくる。あるいはイランですね。ルビオの世界観からみると、そういったところで日本に対して割と親しい態度をとってくるというのは想像できるのではないかと、という気がします。

それから、オバマ訪問ですね。大統領選挙とどういふ影響があるのかということですが、2016年のことですかね、そういうことであると、やはりオバマとしては、焦っているとまでは言いませんけれども、次、大統領候補が誰でもいいように、いまのうちに進めていきたいという思いは強いと思います。ものすごい強いと

思います。

なぜかと言いますと、彼がキューバ政策を転換したことの象徴的な意味、これはオバマが2009年4月、最初にキューバ政策に手をつけたときにもよく言われたんですけども、キューバ政策というのは対話外交の試金石である。つまり、国際関係の対立だとか紛争だとか、そういったものは対話によって解決することを目指すべきである、こういったことを言っていた。これが、ある意味では、今回、少なくともキューバにおいては達成されたかのように見える。それがうまくいかないと大変なことになる。キューバでしたことを否定されると、オバマ外交の原理みたいなもの、これも否定されるのではないかと。

あるいは、次の大統領がそういったことを認めないとか、そういうことになってくると、彼がやったレガシーがまた消えてしまうということになってしまいますから、後戻りしないために、いま必死になっているような政策——きのうもたしかアメリカ人の渡航への規制が大幅に緩和されたということがかなりニュースになっていましたが、いろいろやってきていると思います。

質問 アメリカ・キューバ関係で、もう少し聞きたいんですけども、いまのオバマがやっている制裁緩和は、大統領権限でできる範囲内ということですか。共和党が議会の握っている法律は変わらない。次の政権がもし共和党政権になったら、オバマのやったキューバとの関係改善はまた敵視政策に戻るんですか。

ルビオならキューバ敵視政策に戻る可能性

上 これはどんどん予想になってきて不安ですけども、私は、ルビオが撤退したことはかなり大きかったと思います。ルビオであれば、おそらく何かをやったと思います。かなり敵視政策に近いことをやり始めたのではないかと、思いました。彼は主流派ですけども。

といいますのも、西半球問題というか、ヒス

パニック＝ラティーノ出身であることが、ルビオは外交委員会にいるんですが、共和党の代弁者みたいな位置を確保することの役に立ったわけです。自分がヒスパニック＝ラティーノであるから、中南米のことについては私が専門家である、実際スペイン語がしゃべれますから。かなりそれが党全体の意見をそういった方向に向けていくという意味では、かなり有利な立場にあった人だった。

ところが、非主流派のトランプなどは、たしかキューバ、いいんじゃないのと言っているくらいです。彼はたしかプーチンでも、俺をリスペクトするんだったら、俺もリスペクトするとか、うまく取り引きできるとか言っているくらいですから、当然ラウル・カストロだってそういう話になってくるわけですね。

だから、そのあたり、誰が勝つことになるのかということによっても違いが出てきたところではないかなと思います。

ですから、ルビオが撤退したことは、ますますオバマがキューバでやっていくことは今後に対して大きな意味を持ってくるのではないかな、と思いました。

質問 ニューヨーク・タイムズに、今回のオバマのキューバ訪問はニクソンの中国訪問に匹敵する歴史的な大事件だという中南米専門家のコメントが出ていました。確かに、ここまで進むとは思えないような形で進展していますが、今回、オバマはラウル・カストロとは会談するけれども、フィデルとは会わないと言われていました。フィデル・カストロと会わない理由、あるいは、もし会うとどんな政治的なリスクがあるのでしょうか。

なぜオバマはフィデル・カストロと会談しないのか

上 フィデル・カストロといいますと、やはり1959年キューバ革命から、「顔」ですね。62年キューバ危機、これもやっぱり顔ですね。フィデル・カストロに対するアレルギーが強いと思うんですね。

最近、教科書も少しニュアンスを変えてきていると思いますが、割と、例えばキューバ危機

を引き起こしたのはフィデル・カストロのせいだとか、そういうことを言う人は、アメリカの中でも多い。少しずつその見方が変わってきているとは思いますが、そういった意味で、突然、平和を脅かしたとんでもないやつ、というイメージが一回つけられているわけですから、キューバ系でなくても、やはり抵抗感が残っている。

逆に、ラウル・カストロであれば、そういったところは割と薄まっているのではないかなと思います。ですから、ラウルと握手するのと、フィデルと握手するのでは、かなり文脈というか、政治的な文脈、あるいはメディアに対する捉えられ方が違うと思います。

あえてオバマがそこでリスクを侵す可能性は低いのではないかなと思います。

現実主義で進めるグアンタナモ返還交渉

質問 キューバが「グアンタナモはもう返還してほしい」と求めると思うんですが、これは将来可能だと思いますか。

上 将来のことなので、ちょっとわからないというのも一つあるんですけども、ちょっとおもしろい話をしますと、これはいま言っているのかわからないんですが、アメリカとキューバは、結構昔から国交正常化の交渉はしているんです。1970年代に秘密交渉をやっています。私もそのことについて書いたんですが、意外にもグアンタナモの返還は国交正常化の後にやると最初から考えていたみたいです。

もちろん、表向きでは、アメリカはグアンタナモを返還するべきだとキューバはいうので、すけれども、キューバ政府、特にフィデルあるいはラウルは、グアンタナモ返還がいかに難しいかをわかっています。最初から返還を求めて国交正常化交渉を潰してしまうのは避けたいというのがありましたから、割と是々非々で動いている面がある。

例えば、イラク戦争のときにグアンタナモが取り上げられましたけれども、テロを支援した、あるいは支援しているのではないかなという人をグアンタナモに入れるわけですね。あれは、

本来であれば、そんなものキューバ政府の許可なしに使ってはならないという話になるわけです。しかし、キューバ政府は結局それを認めていた。

ですから、割とプラグマチック、現実主義的に動いているように思えます。将来的に返してもらうというのは、こちらの立場として絶対に譲らないと言いつつも、その中でアメリカが何をするかという話については、あまり立ち入らないわけです。

ですから、私の見解としては、このまま関係の改善が続いて、その流れができて、あとはアメリカの国内政治、国内の中で支持が広がっていけば、当然出てくると思いますが、それまではキューバも粘り強く主張を続けていくことになるかなと思いました。

アジア系とヒスパニック系のマイノリティ連合ができるか

質問 人口変化と将来予測ではヒスパニックだけでなく、アジア系も伸びていて、伸び率で言うとアジア系のほうが多いと思います。これについて、2つ質問があります。1つは、ヒスパニックに対して起きているようなネイティブイズムが、アジア系アメリカ人に対しても起きているのか。2つ目は、アジア系がもっと伸びていくとヒスパニックと拮抗してくると思いますが、そうなったときに、アメリカ政治のダイナミズムにどういう影響を与えるのか、ヒスパニックとアジア系が一種のマイノリティ連合のような形で組んでいくのか、それとも別の現象が起きるのか。

上 これも将来の話になってきますが、ネイティブイズムがアジア系に向かうかということですね。向かうと思います。必ずしもこの現象自体はどこか特定の国に関するものではありませんから、外国生まれとか、外国と関係している人をたたく。それは、例えばいま日本製品、トヨタだとかホンダだとか、そういったものをトランプ氏は「彼らは不当な貿易で、貿易の枠組みが不当だからわれわれは負けている

んだ」ということを言っていますから、これが一つ線を越えれば、そこで働いている人たちに対して当然何か言うかもしれない。あるいは、それを勘違いして、日本車だけではなくて、実際の人間たちにも勝手に解釈してしまう人たちがトランプを支持する人たちの中に出てくるかもしれない、それは十分考えられると思います。

ほかのマイノリティもそうですけれども、ちょっと前に最高裁の人で、たしかアファーマティブ・アクション (affirmative action) を批判することを言っていた人がいますけれども、こういったマイノリティだからこそ有利であるというシステムそれ自体に反感を強めるということはこれからも考えられます。それで、アジア系も当然その攻撃の対象になってくるかなと思います。

マイノリティの連合をアジア系とヒスパニック系が固まってつくってくるのではないかな。これもやはり民主党と共和党の関係によるのではないのでしょうか。このまま、民主党有利ですから、当然アジア系が伸びていけば、民主党を支持している人が多いわけですから有利になる。

これは実際に起きているのはカリフォルニアですね。カリフォルニアは昔、レッド・ステイト (共和党=赤色=強い州) で、私が記憶している限りでは、戦後から1980年ぐらいまで、たしか共和党がほとんど勝っている。民主党は大統領選挙でたしか1回ぐらいしか勝っていない。それが90年代の移民たたきで、ヒスパニック票が伸びてきたこともあるんですけども、アジア票も伸びてきましたから、それが民主党に加わることによって、いまカリフォルニアが共和党候補を支持するということは、ほとんど考えられないですね。

だから、そういったことを受けて、共和党が今後どういった政党のモデルをつくっていくのか。このまま人口規模が縮小していく白人、とりわけ労働者階級、その人たちに頼って何とかやっ払いこうとするのか、それともモデルチェンジして、人種だとか文化だとか、そういったものにかかれていくメッセージを發していくのか、これは本当に共和党次第だと思います。

共和党のモデルチェンジはどうすれば可能か

質問 共和党のモデルチェンジが、どういう形で具体的に可能性があるのでしょうか。共和党はおそらくそれをしない限りは衰退し、票はとれない。ここまで来ると、トランプが起爆剤になるのかどうか知りませんが、それにしても、マイノリティに手を伸ばしていく共和党というのはあまり想像できません。アメリカを研究している学者の方に聞くと、共和党のモデルチェンジがアメリカの二大政党制の行方を決めるとおっしゃるんですけども、果たして具体的にどういうことを想定しておっしゃっているのか。いま、実際、その兆しはあるのでしょうか。

上 ご質問はごもっともなところで、私も頭を抱えてしまうんですけども、最初は、ルビオが出てきたことは一つの兆しだと思ったんです。彼が出てきて、マイノリティであるがゆえに自分を売り込んでいく。マイノリティが出てくることに対して、当然共和党にいた白人の人たちには拒否感があるわけです。その拒否感を和らげながら、マイノリティが出てくるのが必ずしも脅威ではない、そういったメッセージを発する人がルビオだったのではないかと。ただ、2016年ではまだ十分に機が熟していなかった。

ですから、私、ちょっと無責任ですけども、もう一度、共和党は壊滅的なダメージを受けるしかない、という印象を持っています。もう一回負けて、それから立ち直れるかどうかをみてもいいんじゃないか、と勝手に思っています。それぐらい、トランプ現象というのはびっくりしましたし、怖いなという気がしました。

ルビオはまた大統領選に出てくる

質問 マルコ・ルビオは、2020年、あるいは2024年の大統領選に勝ち目はありますか。

上 これも将来のことで、何を言っても後でたたかれるだけだと思います、あいつはあんな

ことを言っていたということで、私が次に出てくるときは、「違いましたね」という話になりますから……。

私は、ルビオは出てくると思います。2020年か2024年、どちらかわかりませんし。まだ若いですよ。今後、彼が何をするかというのは、注目していてもいいんじゃないかと思います。そこで勝てるかどうかというのは、相手の候補ですね。

ヒラリー・クリントンが一番共和党の中で恐れていたのはルビオだと言われていましたから、それは今後、どこかでずうっと残っていく言説なのか。あのとき、ルビオを出しておけば勝ったんじゃないか、みたいな話は出てくるかもしれません。これはもちろんトランプが負けると予想して言っているんですけども。とりあえず今言ったことは、後で忘れていただければと思います。

ネイティヴィズムに向かわなかったサンダースに注目を

質問 心配するのは、世界中のネイティヴィズム、排外主義の増大です。過去の例から言いますと、確かに経済的なレベルが下がると、排外主義がずうっと上がって、戦前のドイツは経済が疲弊してヒトラーが出てきた、という一つの例があります。いまヨーロッパも排外主義が出てきて、経済が縮小しています。日本も縮小していて、ヘイトスピーチの動きがある。アメリカもそうです。この排外主義がアメリカで増大するのは避けられないのでしょうか。

上 大変貴重な質問をありがとうございます。それと関係しているかどうかわからないですけども、ぜひ注目していただきたいのが、サンダースの選挙戦だったと思います。

1920年代ぐらいに、彼のような支持基盤を持つ人たちが出てくると、おそらくネイティヴィズムの方向へ向かったと思うんですね。似たようなところがありますから、格差問題とか。労働者たち、いくらやっても生活がうまくいかない、こういった人たちが集まってきた。特に

若者ですね。当然彼らだって、誰か敵がいればそれに向かうかもしれないわけですが。

ただ、向かわなかった。それは多分、一つは、サンダース自身、民主党のほうがりわけヒスパニック票によるところが大きい。ネバダ州とか、選挙戦の序盤でも、ヒスパニック＝ラティーノ票がかなり注目されていた。こういうのもあって、サンダースはヒスパニック＝ラティーノ票を取ろうとしましたから、ネイティヴィズムなんて出せるわけがないんです。

2つ目は、公民権運動以来、やっぱり変わってきているんですね。サンダースをみていると、もっと期待が持てるというか、ちょっとバイアスがかかっているかもしれない。ある程度、黒人ですね、特に厳しい人たちがいても、ヒスパニック＝ラティーノのほうに怒りが向かわないで、何とかして連合をつくっていくことをやっています。移民の代わりにその敵として出てくるのがウォールストリートなわけですけども。要は、どこに敵をつくるかです。ウォールストリートに敵をつくるということであれば、ネイティヴィズムにはならないと思います。あるいはまた違う敵も見つかるのかもしれませんが。

トランプとサンダースを比較するというのは、そういう意味ではご関心に沿うかもしれません。

ヒスパニック＝ラティーノ、ヒスパニック、ラティーノ 三つの違い

司会 時間が来たんですけども、最後に2つだけ確認の質問です。きょうは、ずうっと「ヒスパニック＝ラティーノ」という言葉を使われました。この「ヒスパニック＝ラティーノ」と「ヒスパニック」、それから「ラティーノ」、この3つはどう違うんですか。

上 決定的な話ですね。よく言われているのが、「ヒスパニック」というのはスペイン語系、つまりヨーロッパからのイメージを喚起しやすい単語である。「ラティーノ」というのは、逆に人種ですね。ラテン、特に中南米から来た

ということをイメージしやすい。ですから、歴史的にみますと、「ヒスパニック」と言うと、どうしても彼らを白人としてみたいという人たちがあえて「ヒスパニック」という言葉を使いたがる。具体的に言えば、共和党なわけです。

ただし、それが一方的だ、上から目線だということで、自分たちはそうではなくて「ラティーノ」だ、自分たちの文化があるんだ、つまりラテンアメリカに戻っていこうとする、そういう人たち、人種をアピールする人たちが「ラティーノ」を使いたがる。具体的に例を挙げれば、民主党寄りの労働組合だとか、プエルトリコ系とメキシコ系が何とかして団結してやっていこうというときに出てくる言葉として出てきやすい。だから、ニュアンスがかなり違うんですね。

ただ、私はいずれにしても、これは難しいんですが、もともとは造語です。こんな単語はもともとはないわけです。ですから、本当にこの人たちが実際にそれに属すると言われている人たちがそういったアイデンティティーを持っているかということ、そこはまた別の話で、アメリカに来たばかりの人たちは、当然キューバから来た人はキューバ人、メキシコから来ればメキシコ人だと、あるいはプエルトリコから来ればプエルトリコ人だと、また別のアイデンティティーを持っていますから、本当にこの「ヒスパニック＝ラティーノ」というアイデンティティーが中核にあるのかというのは、また違うと思います。

だから、政治的な利害がここにも働いているということ。どう自分たちを呼ぶのか、あるいは位置づけるのか。これが必ずしも価値中立的な言葉ではないということは考えてもいいんじゃないかと思いました。

ヒスパニックの大統領実現はそれほど遠くない

司会 最後に、究極の将来の質問ですけども、ヒスパニックの大統領はいつごろ実現するんですか。

上 そうですね。2020年とか、そんなこと

を言っているとますますたかれますけれども。それほど遠くはない、と私は思っていますが、もしかしたら 50 年先かもしれませぬし、何とも言えないですね。共和党でルビオが出てきたら、ちょっと近いかなと思ったんですけども。

民主党のほうでも、私が注目しているのは、副大統領候補に誰を選ぶかということですね。そもそも大統領が副大統領候補を選ぶときは、自分に持っていないものを持っている人、つまりキャラクターですね、自分の弱みをうまく消してくれて、あるいは自分が持っていない強みを出してくれる人、そうすると、ちょっとこれは偏見が入っているかもしれませんが、自分が女性であるというのであれば、副大統領は男性を選ぶ。あるいは、ヒスパニック＝ラティーノ票を取りに行くことがあれば、当然、そうした人たちを選ぶかもしれない。

いま、巷で言われているのは、フリアン・カストロという人ですか。オバマ内閣の中にも入っている人です。あるいは労働長官でトム・ペレスですか。こういった人たちの名前が挙がっています。どういうふうに選ばれるかわかりま

せんが、当然、ヒラリーは年齢がちょっと上ですから、彼女が再選を目指すかどうかも含めて、副大統領候補に誰を選ぶかというのは注目してもいいんじゃないかなと思います。

司会 きょうはいろんな質問に答えていただきました。4年ぶりにアメリカから日本に戻ってきて、少なくとも日本の記者が何を知りたがっているかは十分わかっていたかだと思います。未来を知りたがっているということでした。最後に、恒例のゲストブックのサインですが、やはりスペイン語です。“Sí, se puede” どういう意味か、なぜ書いたかを最後に話してください。

上 よく知られているのは、“Yes, we can” ですね。“成せば成る”みたいな、あのオバマ・キャンペーンのスペイン語訳です。もともとはヒスパニック＝ラティーノの中でうまく自分たちの生活を改善しようという人たちが自分たちの中で使っていた単語。それがうまくオバマの“Yes, we can”と重なって、“Sí, se puede”と出てきたんですけども。私、日本に戻ってきて、これから一生懸命働かなければいけないわけですから、自分に対する励ましという意味を込めて、“Sí, se puede”、つまり“Yes, we can”としたいです。

今回はありがとうございました。（拍手）

（了）

2016年3月18日 日本記者クラブ報告

「ヒスパニック＝ラティーノが変えるアメリカ——共和党主流派マルコ・ルビオの浮沈を題材に」

神奈川大学（着任予定）

上 英明

話の流れ

- 「移民国家」アメリカとネイティヴィズムの過去と現在
- ヒスパニック＝ラティーノと大統領選挙
- マルコ・ルビオの浮沈とそれが意味すること

(1) 「移民国家」アメリカ

- 「移民国家」アメリカという自己認識について
- ⇔比較史的枠組み、移民規制の歴史
- Oscar Handrin, *The Uprooted: The Epic Story of the Great Migrations that Made the American People*. (オスカー・ハンドリン『根こそぎにされた人々：アメリカ人民を作った偉大なる移住の荘厳たる物語』)
- 移民人口最小。過去への郷愁。1950年代、「豊かで、美しく、強いアメリカ」。
- 1965年以降、イメージとの齟齬。①非白人移民、②「集団」か「個人」か。

ネイティヴィズムの過去と現在

- 「外国との関係があるという理由をつけて国内のマイノリティを激しく攻撃する態度」(John Higham, *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925*)
- =一種の心理的な防衛行動。
- =移民は「個人」ではなく「集団」(⇔ハンドリンの移民国家イメージ)。
- 80年代英語単一運動(English-Only Movement)、90年代カリフォルニア州住民提案、05-06年移民法改正論議
- 非主流派としての現代ネイティヴィズム

(2) ヒスパニック＝ラティーノと大統領選挙

- 2012年大統領選挙後の共和党指導部の総括報告書「成長と機会」
- “The nation’s demographic changes add to the urgency of recognizing how precarious our position has become. America is changing demographically, and unless Republicans are able to grow our appeal...the changes tilt the playing field even more in the Democratic direction.” (Republican National Committee 2012, p. 7)

- ピュー・リサーチ・センターの人口変化と将来予測
- 「眠れる巨人」(sleeping giant) ? ⇔内的多様性(国籍、世代、地域、史的背景)。
- ネイティヴィズムへの反発。

共和党によるヒスパニック・アウトリーチ

- 1980年、ロナルド・レーガン: “Hispanics are Republicans, they just don’t know it.”
- →フロリダ州のキューバ系とジェブ・ブッシュ (Jeb Bush)
- → (1) 米国の対キューバ政策、(2) フロリダ州の勢力図変化、(3) 2000年大統領選挙、(4) ネイティヴィズムの拒否 (2004年大統領選挙)。
- 2008年、2012年大統領選挙。ロムニーの「自己追放」(self-deportation)。

(3) 共和党主流派マルコ・ルビオの盛衰

- 生い立ち、レーガンへの憧れ。
- 政界進出、「茶会候補」。2010年、上院議員。
- 「差異」を売り込むルビオ。⇔「差異」を隠すテッド・クルーズ。
- =マルコ・ルビオの全米保守行動会議 (CPAC) 基調演説 (参考資料2)。
- 2016年共和党予備選におけるルビオの限界

おわりに

- 「投票獲得組織としての政党の自殺」。=もう一つの「トランプ現象」?
- ネイティヴィズムと「民主主義」。

参考文献（抜粋）

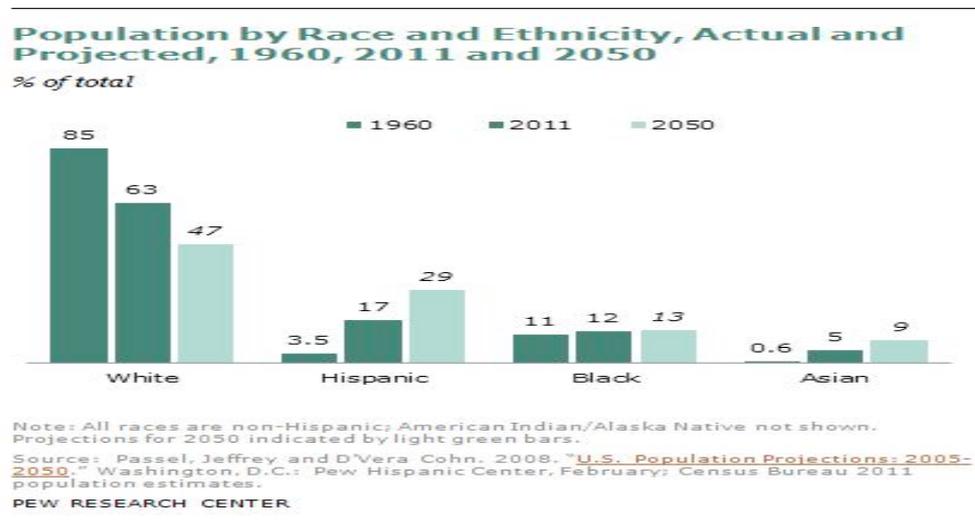
- Abranjano, Marisa A. *Campaigning to the New American Electorate: Advertising to Latino Voters*. Stanford, CA: Stanford University Press, 2010.
- Barreto, Matt, and Gary M. Segura. *Latino America: How America's Most Dynamic Population is Poised to Transform the Politics of the Nation*. New York: Public Affairs, 2014.
- Beltrán, Cristina. *The Trouble with Unity: Latino Politics and the Creation of Identity*. New York: Oxford University Press, 2010.
- Bodnar, John. *The Transplanted: A History of Immigrants in Urban America*. Bloomington: Indiana University Press, 1985.
- Connaughton, Stacey L. *Inviting Latino Voters: Party Messages and Latino Party Identification*. New York: Routledge, 2005.
- Dahl, Robert. *Who Governs? Democracy and Power in an American City*. 2nd ed. New Haven, CT: Yale University Press, 2005.
- de la Garza, Rodolfo O. "Latino Politics." *Annual Review of Political Science* 7 (2004): 91-123.
- Espino, Rodolfo, ed. *Latino Politics: Identity, Mobilization, and Representation*. Charlottesville: University of Virginia Press, 2008.
- Foner, Eric. *The Story of American Freedom*. New York: Norton, 1998.
- García Bedolla, Lisa. *Fluid Borders: Latino Power, Identity, and Politics in Los Angeles*. Berkeley: University of California Press, 2005.
- Gerstle, Gary. *American Crucible: Race and Nation in the Twentieth Century*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2001.
- Handrin, Oscar. *The Uprooted: The Epic Story of the Great Migrations that Made the American People*. Boston: Little, Brown and Company, 1951.
- Hero, Rodney E. *Latinos and the U.S. Political System: Two-Tiered Pluralism*. Philadelphia: Temple University Press, 1992.
- Higham, John. *Strangers in the Land: Patterns of American Nativism, 1860-1925, with a New Epilogue*. New Brunswick, NJ: Rutgers University Press, 2002.
- Huntington, Samuel P. *Who Are We? The Challenges to America's National Identity*. New York: Simon & Schuster, 1996. [邦訳：サミュエル・ハンチントン『分断されるアメリカ』（鈴木主税訳）集英社，2004年]
- Jacobson, Matthew Frye. *Special Sorrows: The Diasporic Imagination of Irish, Polish, and Jewish Immigrants in the United States*. Cambridge: Harvard University Press, 1995.

- Jones-Correa, Michael. *Between Two Nations: Political Predicament of Latinos in New York City*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1998.
- Kami, Hideaki. "Ethnic Community, Party Politics, and the Cold War: The Political Ascendancy of Miami Cubans, 1980-2000." *Japanese Journal of American Studies* 23 (2012): 185-208.
- Lubell, Samuel. *The Future of American Politics*. 3rd ed., Revised. New York: Harper Colophon, 1965.
- Ngai, Mae M. *Impossible Subjects: Illegal Aliens and the Making of Modern America*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 2004.
- Portes, Alejandro, and Alex Stepick. *City on the Edge: The Transformation of Miami*. Berkeley: University of California Press, 1993.
- Republican National Committee, Growth and Opportunity Project: RNC Report. December 2012, http://goproject.gop.com/rnc_growth_opportunity_book_2013.pdf (accessed March 10, 2016).
- Roig-Franzia, Manuel. *The Rise of Marco Rubio*. New York: Simon and Schuster, 2012.
- Rubio, Marco. *An American Son: A Memoir*. New York: Sentinel, 2012.
- Tyrrell, Ian. *Transnational Nation: United States History in Global Perspective since 1789*. New York: Palgrave Macmillan, 2007.
- Zolberg, Aristide R. *A Nation by Design: Immigration Policy in the Fashioning of America*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006.
- 大津留（北川）智恵子「エスニック・グループと政党——ヒスパニック系の政治化と共和党」五十嵐武士編『アメリカの多民族体制——「民族」の創出』東京大学出版会、2000年。
- 賀川真理『カリフォルニア政治と「マイノリティ」——住民提案に見られる多民族社会の現状』不磨書房、2005年。
- 斎藤眞「アル・スミスと民主党の再編——都市化に伴う政治指導の変容」斎藤眞編『現代アメリカの内政と外交』東京大学出版会、1959年。
- 平田美和子『アメリカ都市政治の展開——マシーンからリフォームへ』勁草書房、2001年。
- 古矢旬『アメリカニズム——普遍国家のナショナリズム』東京大学出版会、2002年。
- 松岡泰『アメリカ政治とマイノリティ——公民権運動以降の黒人問題の変容』ミネルヴァ書房、2006年。
- 村田勝幸『＜アメリカ人＞の境界とラティーノ・エスニシティ——「非合法移民問題」の社会政治史』東京大学出版会、2007年。
- 油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ——世界史の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会、2003年。

資料 1

アメリカ合衆国の人口統計予測など（ピュー・リサーチ・センター発行）

(A) 集団ごとの人口変化と将来予測



(B) Latino National Survey, 2006 (Barreto and Segura 2014 を基に報告者作成)

	第一世代	第二世代	第三世代	四世以降
カトリック	73.8%	69.7%	66.8%	58.1%
軍役（本人・家族）	16.1%	48.9%	68.6%	72.3%
高等教育未満	49.7%	22.9%	17.6%	16.2%
世帯所得\$35,000 未満	53.4%	34.9%	29.2%	33.4%
非ラティーノ婚姻率	13.3%	32.2%	42.6%	53.3%
英語の習熟	38.3%*	93.2%	98.6%	99.0%
スペイン語の習熟	99.2%	91.6%	68.7%	60.5%

資料 2

マルコ・ルビオ、CPAC2010 年年次大会基調演説（概略、強調は著者附則）¹

（前略）「この国に生まれ、育った多くの私たちは、アメリカが本当にどれほど特別であるかということを簡単に忘れてしまうことがあります。しかし、私を育てたのは、亡命者であり、自分たちの国を失うことがどういうことかを知っている人々であり、なぜ選挙が重要なのか、あるいはそれがいないことが重要なのかについて特殊な観点を抱く人々であり、アメリカがどれだけそれ以外の世界と違うのかを明確に理解し、そのことを私にずっと言い聞かせてくれた人々でした。・・・アメリカが偉大なのは、他の場所では不可能な夢がここでは可能になるということなのです」。

「私の両親はアメリカにほとんど何も持たずに来ました。英語も話せず、お金もなければ、友人もいませんでした。ただ唯一持っていたのは、自分たちの子供たちに彼らが手にしなかった全ての機会を与えようとする強い意志でした。私の母親はレジ係、工場労働者、K-Mart の在庫管理事務員として働きました。私の父親は主にバーテンダーとして働きました。・・・両親は私の年齢ぐらいのときに夢を抱き、何かを成し遂げたいと考えていたのです。しかし、彼らが生まれた場所のために、彼らが国を失ったために、彼らの夢が叶う可能性はなかったのです。そこで、彼らはアメリカに来て、働き、自分たちが出来なかった全てのことをするチャンス子供たちに与えること、これを生涯の使命としたのです」。

「だからこそ、今、私がこれまでに手にし、これから手にするチャンスは全て、神に、両親の犠牲に、そしてアメリカ合衆国に負っているのです。・・・彼らのストーリーはアメリカの奇跡の本質なのです。そのストーリーは世界の他の場所では稀でありながら、ここではありふれたものなのです。なぜならそれは先人たちが自由の社会に生きることを選択したからです。それは先人たちが自由な企業活動を選択したからです。しかし、今の指導者たちは全く違うものを私たちに選択するよう迫っています。彼らは私たちに私たちとその他のほかの世界とを隔ててきた何かを捨てるよう要請しているのです」。

「私たちは選択しなければいけません。・・・あなたの子供たちにあなたの希望と夢を受け継いでほしいと思いますか」（会場は Yes と応答）。

「あなたは彼らに未解決の問題を受け継いでほしいと思いますか」（会場は No と応答）。

・・・「私たちは例外的でありたいのでしょうか。それとも、私たちはすすんで世界の他の人々のようになりたいと思うのでしょうか」（会場は No と応答）。

¹ Marco Rubio's CPAC Speech: The Transcript, *Washington Post*, February 19, 2010, <http://voices.washingtonpost.com/44/2010/02/marco-rubios-cpac-speech-the-t.html> (accessed January 19, 2011).